

# Kullūka の Manvarthamuktāvali 第 1 章 にみる Bhāskara 説受容の事実

正 信 公 章

## I

Vedānta 学派の学説要録 Brahmasūtra その他に注解を著した Bhāskara は、後代、Vedānta 諸派に広く知られた学匠であるが、今日、彼の著作に対する注釈その他の文献は一切伝わらず、また、彼を始祖と仰ぐ確固たる学統の存在した事実も報告されていない<sup>②</sup>。しかし、このことは、Bhāskara の学説がのちの思想界に全く受け入れられなかったことを意味するものではない。以下には、法典注釈家 Kullūka の著した、Manusmṛti に対する注釈 Manvarthamuktāvali から第 1 章初めの部分を取りあげて、そこにみられる Bhāskara 説受容の事実を明らかにし、あわせて若干の考察を試みることにしたい。

本稿で用いる略号とその意味を使用刊本とともに以下に記す。

- M Manusmṛti, with nine commentaries by Medhātithi, Sarvajñanārāyaṇa, Kullūka, Rāghavānanda, Nandana, Rāmacandra, Maṇirāma, Govindarāja and Bhāruci, ed. by J.H. Dave, vol. I, Bombay 1972 (Bhāratīya Vidya Series 29)
- BS Brahmasūtra, with a commentary by Bhāskarāchārya, ed. by V.P. Dvivedin, Benares 1915 (Chowkhamba Sanskrit Series 20)
- K Kullūka (テキスト箇所を指示する場合にのみ使用)

## II

周知のごとく M 第 1 章は世界創造をその主たる内容としている。注釈者 Kullūka は、法典中の一章としては極めて特異な性格を有する同章を解釈するにあたり、その理論的根拠を Vedānta 学説に求めている。それが最もよくあらわれているのは、彼の注釈中、生成世界の根本質料因 (prakṛti) が問題とされる箇所、BS が引用される箇所においてである。

以下、二つの場合に分けて論述する。

### イ) Kullūka による質料因解釈

生成世界の根本質料因 (以下単に質料因という) についての記述は、創造者 Svayambhū によ

る世界創造の第一段階が Manu を語り手として述べられる第 1 章第 8 詩節下にみられる。

so 'bhidyāya śarirāt svāt sisṛkṣur vividhāḥ prajāḥ/ apa eva sasarijādau (M1.8abc)  
かの [Svayambhū] は、種々の生類を創り出そうと、一念をこめて、みずからの身体から最初  
に [原] 水を放出した。

abhidhyānapūrvikām sṛṣṭim vadato manoḥ prakṛtir evācetanā svatantrā pariṇamata ity  
ayaṃ pakṣo na saṃmataḥ, kiṃ tu brahmaivāvyākṛtaśaktyātmanā jagatkāraṇam iti  
tridaṇḍivedāntasiddhānta evābhimateḥ pratibhāti. (K ad M1.8, p. 25 ll. 5—7)

[本文に『一念をこめて……放出した』とあるごとく、] 念じての放出を語っているところ  
からみて、Manu が [みずからの世界観として] 考えているのは、精神性を有さない、独立  
原理たる「原質」が [生成世界へと] 開展するという [Sāṃkhya 異端] 説ではなく、未開  
展の能力としての [、精神性を有する] 「梵」を世界 [開展の] 因とする Tridaṇḍin 派の  
Vedānta 正統説である、との印象を受ける。

Kullūka は詩節中の語 'abhidhyāya' に着目し、「念ずる」(abhidhyāna) という知的行為が「放  
出」(sṛṣṭi) に先行していることを根拠に、ここでの創造形式を、世界因に知的 (cetanā) 原理  
——「梵」(Brahman)——をすえる Vedānta 学説によって基礎づける一方、生成を非知的 (ace-  
tanā) 原理——「原質」(Prakṛti)——の開展とみる Sāṃkhya 学説に対しては、これを文意にそ  
ぐわないとして事実上否定している。ここで注意すべきは、Kullūka の言及する「Vedānta 正統  
説」、すなわち、「未開展の能力」(avyākṛtaśakti) としての「梵」を世界因とする説が、「Trid-  
aṇḍin 派の [それ]」と限定されている点である。ただ「梵」それ自体を世界因としてかけざる、  
Vedānta 学派の伝統を彼が熟知することから考えて、この限定は、Tridaṇḍin 派で、「未開展の  
能力」なるものが「梵」のなんらかの面をあらわす二次的概念として独自に想定されていたこと  
を示すものと解釈することができる。この「未開展の能力」については、Kullūka がこれをより  
明確な形で、質料因と理解していたことが、少し先の詩節に対する注釈箇所 (paramātmāna ev-  
āvyākṛtaśaktirūpaprakṛtisahitāt K ad M1.15, p. 36 1.28)<sup>⑤</sup> から知られるが、この点および  
Tridaṇḍin 派の性格については以下の論述の中でふれることとしたい。

svāc charirād avyākṛtarūpāt. avyākṛtam eva bhagavadbhāskariyavedāntadarśane prakṛtis,  
tad eva [2 語省略]<sup>⑥</sup> śariram. (K ad M1.8, p. 25 ll. 10—11)

『みずからの』、『身体から』、すなわち、未開展態から。尊師 Bhāskara の Vedānta 学説で  
は、未開展態が質料因に充当し、それが [ここにいう] 『身体』である。

Kullūka は続いて前掲詩節中の句 'śarirāt svāt' の注釈にうつり、創造者 Svayambhū がそこ

devān asṛjatāsrgram iti manuṣyān indava iti pitṛms(sic) tirah pavitram iti grahān āśava  
iti stotraṃ viśvānīti śaṣṭram abhi saubhagēty anyāḥ prajāḥ. smṛtis tu sarveṣāṃ tu  
sa nāmānītyādikā manvādirpāṇāiva. (K ad M 1.21, p. 48 ll. 20—29 : Bhāskara ad BS  
 1.3.28, p. 61 1.22—p. 62 1.15)

上記 3 例をそれぞれ、Bhāskara の対応する注解文と比較してみると、下線部で字句・語順とも完全に一致することが確認される。これらの字義説明は明らかに Bhāskara の注解文によるものであり、なかでも、説明が詳細にわたる第 3 例などは事実上これからの転載とみなしてさしつかえない。<sup>①</sup>

### III

以上、Kullūka による質料因解釈および引用 BS の字義説明を検討することによって、彼が M 第 1 章を注釈するにあたり、Tridaṇḍin 派の学匠 Bhāskara にはほぼ全面的に依拠した事実を明らかにすることができたと考えるが、この事実はまた、一連の推測を可能にする。Manvarthamuktāvali に関して、その冒頭に置かれる詩文の一節は、同書が Kullūka とパンディット達の共作によるものであり、Kāśī で作成された旨を明記している。この記述は、Bhāskara の学説がひとり Kullūka のみならず複数の学匠によって採択されたことを示唆するとともに、これを可能にしたなんらかの状況が同書作成当時 (Kane の概算で 1250 年前後) の Kāśī に存在したことをもうかがわせて興味深い。さらにもう一つ、同書が後世インド全域に流布し名声を博したこともまた、Bhāskara の学説の受容形態を探るうえで見逃せない事実である<sup>②</sup>と考える。

#### 注 記

- ① Śaṅkara・Rāmānuja・Madhva 各派の文献から Bhāskara 関係の記述を収集したもとして B.N. Krishnamurti Sarma, “Bhāskara — a forgotten commentator on the Gīta”, IHQ 9 (1933), pp. 663~677 参照。
- ② ただし、文献資料に、学説継承の行われた可能性を示唆する記述が無いわけではない——barhmapariṇater iti bhāskaragotre yujyate (Udayana, Nyāyakusumāñjali, 2.3 (散文箇所), cf. Dvivedin 後出 edition, Bhūmikā, p. 7 l. 5ff.)。

また、Ānandānubhava (Śaṅkara 派) の著 Nyāyaratnadīpāvali に対する一注釈 (ともに V. Jagadisvara Sastri and V.R. Kalyanasundara Sastri (ed.), Madras 1961) の中に “bhāskariyaś codayati — nanv iti” の一句がみえる (p. 311 ll. 26~27) が、これは、実在する特定の「Bhāskara 学徒」への言及というよりはむしろ、時代的に先行する論敵 (Bhāskara) をその批判者 (Ānandānubhava) と同じ対論の場にひきおろすために注釈者の用いた便法である可能性が強い。つまり、この場合の ‘bhāskariya’ は、便宜上設定された仮空の「Bhāskara 代弁者」とみることが可能である。

なお、近代の学者が、Vedānta 諸派の文献中に批判される Bhāskara 説ないしはその発展説に言及して用いる ‘Bhāskara and his followers’ (S. Dasgupta, A History of Indian Philosophy, vol. III, p. 301), ‘The Bhāskarites’ (ibid., p. 431), ‘the BHASKARA school’ (J.A.B. van Buitenen, Rāmā-

から最初に原水を放出したところの『みずからの身体』に創造のもととなる質料因としての意義を認めてこれを「未開展態」(avyākṛta) と置きかえ、その根拠として、質料因を「未開展態」と規定する Bhāskara 説をあげる<sup>⑦</sup>。この「未開展態」が、さきに Tridaṇḍin 派で想定されていたと推定した「未開展の能力」と同義の扱いをうけていることは、直前にみたごとく後者も同様に質料因とみなされている点から容易に察知されるが、同じことはまた、「未開展態」が直後に「能力」(śakti) と規定される点、Bhāskara がほかならぬ Tridaṇḍin 派の学匠として広く知られていた点から確かめられる<sup>⑧</sup>。

これら二つの概念が、それぞれいかなる意味内容を有するのか、Kullūka の扱いにみられるごとく互いに等価なものであるか否かはなお検討を要する問題であるが<sup>⑨</sup>、これまで述べてきたところから、Bhāskara (より正確には彼を含めた Tridaṇḍin 派) に帰属する概念が、Kullūka の M 第 1 章における質料因解釈に重要な役割をはたしたことは確実である。

#### ロ) Kullūka による引用 BS の字義説明

Kullūka は M 第 1 章を注釈するなかで BS を自説の典拠として幾度か引用し、Vedānta 学説信奉者たる一面をのぞかせている。そして、そのうち BS 1.1.2, 1.1.5, 1.3.28 の各 sūtra に対して、引用の直後で字義説明を加えている。以下に原文のみ列挙する。

...*janmādy asya yata* iti (BS 1.1.2) *dvitīyasūtraṃ bhagavān bādarāyaṇaḥ praṇināya. asya jagato yato janmādi sṛṣṭisthitipralayam iti sūtrārthaḥ.* (K ad M1.5, p. 17 l.31—p. 18 l.1 : Bhāskara ad BS 1.1.2, p. 8 ll. 10—11)

*ata eva śārīrakasūtrakṛtā vyāseṇa siddhāntitam iḥṣater nāśabdāṃ* iti (BS 1.1.5). *iḥṣater iḥṣaṇāśravaṇān na pradhānaṃ jagatkāraṇaṃ, āśabdāṃ na vidyate śabdāḥ śrutir yasya tad āśabdāṃ* iti sūtrārthaḥ. (K ad M1.8, p. 25 ll. 8—10 : Bhāskara ad BS 1.1.5, p. 21 ll. 19—21)

*tathā ca śārīrakasūtraṃ śabda iti cen nātaḥ prabhavāt pratyakṣānumānābhyām* (BS 1.3.28). *asyārthaḥ. devatānāṃ yigrahavattve vaidike vasvādīśabde devatāvācīni virodhaḥ syād vedasyādīmattvaprasaṅgād iti cen, nāsti virodhaḥ. kasmāt. ataḥ śabdād eva jagataḥ prabhavād utpatteḥ. pralaya-kāle 'pi sūkṣmarūpeṇa paramātmani vedarāśiḥ sthitaḥ. sa iha kalpādu hiranyagarbhasya paramātmana eva prathamadehimūrter manasy avasthāntaram anāpanaḥ susuptaprabuddhasyēva prādurbhavati. tena pradīpsthānīyena suranaratiryagādīpravibhaktāṃ jagad abhidheyabhūtaṃ nirmimīte. katham idaṃ gamyate. pratyakṣānumānābhyām śrutismṛtibhyām ity arthaḥ. pratyakṣaṃ śrutir anapekṣatvāt. anumānaṃ smṛtir anumīyamānāśrutisāpekṣatvāt. tathā ca śrutih— eta iti vai prajāpatir*

nuja's Vedārthasaṃgraha, p. 188 n. 58) などの表現も、あるいは上に述べたと同じ観点から説明できるのではないかと考える。

- ③ 直後に BS 冒頭第 5 sūtra が引用される (II. 8~9, 本文 II 口) 引用第 2 例参照) ことでも知られるように、ここでの Kullūka の陳述は、同 sūtra に開始される Vedānta・Sāṃkhya 両学派間の一大論争をふまえている。BS 諸注解の伝える両派は、ともに世界の生住滅の背後に唯一根源的なものの存在を認めつつも、それが人格的原理であるか否か——BS の文脈でいえば、精神性を有する「梵」であるか精神性を有さない「第一原因」(Pradhāna——「原質」に相当) であるか——をめぐってしばしば対立する。

Kullūka が、Vedānta 学説をとる根拠として、「思念」(abhidhyāna) をあげるのも、創造原理の精神性の有無を、創造に先だつ「思慮」(ikṣati) の有無によって決定せんとする、上記 sūtra 下での伝統的思考に倣った結果である。

なお、詩節の言及する Svayambhū (男性概念) が人格神の様相を呈していることは、Kullūka の説明をまたずとも、一見して明らかであるが、彼がここで Vedānta 学説を導入したことの意味は、内に Sāṃkhya 的要素を有し (とくに M I. 14~15), そのため注釈者の Sāṃkhya 的解釈 (例えば Svayambhū を「第一原因」とする 'anye' の解釈, Medhātithi ad M I. 11) を許した M 第 1 章の性格から明らかにされねばならないと考える。

- ④ jagatkāraṇatvaṃ ca brahmalakṣaṇam, ata eva brahmamīmāṃsāyām athāto brahmajijñāsēti (BS I. 1. 1) sūtrānantaram brahmalakṣaṇakathanāya janmādy asya yata iti (BS I. 1. 2) dvitīya-sūtram bhagavān bādāraṇaḥ prānināya. (K ad M I. 5, p. 17 l. 30~p. 18 l. 1)

「世界因」(jagatkāraṇa) は、「梵」を定義した上記 3 語からなる第 2 sūtra の内容を端的に示す、Vedānta 学派の用語で、Kullūka 自身の言葉ではない点に注意。

- ⑤ 「至高我」(Paramātman) は、M における創造者 Svayambhū に対する Kullūka 自身の把握 (cf. K ad M I. 6, p. 21 l. 2) で、「梵」と置き換えてさしつかえない。

- ⑥ 原文は 'tasya ca'. 'tasyēdam' と読むべき若干の理由があり、この部分の訳出は保留する。

- ⑦ この Bhāskara 説はのちに再び言及される (prakṛtito mahadādikrameṇa sṛṣṭir iti bhagavadbhāskariyadarśane 'py upapadyata iti tadvido vyācakṣate. avyākṛtam eva prakṛtir iṣyate. ...K ad M I. 15, p. 37 l. 6ff.) が、そこでは同説に基づいて M の当該詩節を解釈する「識者」('tadvidah') の存在した点が注目される (注 ⑬ 参照)。なお、2 か所に BS 注解者 Bhāskara の名がみえることは既に P.V. Kane, History of Dharmaśāstra, vol. I, Poona 1930, p. 361 に指摘がある。

- ⑧ avyākṛtaśabdena pañcabhūta-buddhindriya-karmendriya-prāṇa-mañah-karma-avidyā-vāsanā eva sūksmarūpatayā śakyātmanā sthitā abhidhiyante. (K ad M I. 8, p. 25 ll. 11~13)

ハイフンで結んだ pañcabhūta 以下 vāsanā に至る 8 要素は、最初の 4 要素がおそらくそれぞれさらに五分されて合計 24 要素となる。この一文は、Kullūka のいう「未開展態」の実際の意味内容を示したもとして注目されるが、細部にわたる検討は一切省略し、文全体を理解するうえでの重要参考箇所として K ad M I. 56, また Medhātithi ad M I. 55 を指摘するにとどめたい。

- ⑨ この事実を早い時期に指摘したものに Dvivedin 前掲 edition, Bhūmikā, p. 7 l. 5ff.; Brahmasiddhi by Ācārya Maṇḍanamīśra with commentary by Śāṅkhaṇi, ed. by S. Kuppaswami Sastri, Madras 1937, Introd., p. li l. 3ff. がある。

なお、本論述中では、一定の形而上学的理論と概念を保有する学派ないしは教派という意味から「Tridaṇḍin 派」の呼称を用いているが、tridaṇḍin (「三杖携帯者」の意) は、一義的には、古く律法典に根拠を有する, samnyāsin の一形態である。Cf. Kane 前掲書, vol. II, Poona 1941, pp. 937~938.

- ⑩ 質料因を「未開展態」(avyākṛta) とする説は、Bhāskara の現存する著作中にまもった形で述べられることはない (この点、Kullūka 原文中の 'bhāskariya-' (2 か所) を「Bhāskara 学徒」とする解釈が可) が、次の箇所にその反映を認めることができる——Bhāskara ad BS I. 4. 2~3 (ただし "...

iti kecid evaṃ vyācakṣate”としてあげられる第1解釈、この例では未開展態が能力 (śakti) と考えられている形跡あり)、Bhāskara ad Bhagavadgīta 8. 18 (Subhadra Jha (ed.), Varanasi 1965)。

「未開展態」はもともと、太初の未分化なさまを語る聖句 “tad dhēdam tarhy avyākṛtam āsīt” (Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad 1. 4. 7) に根拠を有する語で、この点は Bhāskara に、そしておそらく Kullūka にもはっきり意識されている (上記第2例、また K ad M 1. 5, p. 18 l. 21 に同聖句の引用あり)。なお、既に Bhāskara 以前に、この「未分化なさま」(avyākṛta) を形而上学的概念に高めた人物に、同 upaniṣad 注解者として知られる Bhartṛprapañca がおり、彼の学的傾向をうけつぐ Bhāskara の「未開展態」を理解するためには、前者の「avyākṛta」概念をもあわせ検討することが必要である。Cf. M. Hiriyanna, “Bhartṛ-prapañca: An old Vedāntin”, Indian Antiquary 53 (1924) pp. 77~86, reprinted in his *Indian philosophical studies 1*, Mysore 1957, pp. 79~94; 中村元『ヴェーダーンタ哲学の発展』岩波書店, 1955, pp. 153~188。

「未開展の能力」(avyākṛtaśakti) の語は Bhāskara の上記著作中に全く認められない (その意味で本訳語で示した以外の合成語解釈も依然可)。ただし、Bhāskara が開展説 (pariṇāmavāda) の一種で、世界の生住滅を主宰神 (Īśvara—梵とほぼ完全に同義) の能力 (śakti) の放射・摂取とみる伝統説 (śaktivikṣepopasamhāravāda) の立場をとることは注意しておく必要がある。Cf. R. Bose, Vedānta-pārijāta-saurabha of Nimbārka and Vedānta-kaustubha of Śrīnivāsa, vol. III, Calcutta 1943, p. 184 (同頁 n. 2 の指示するテキスト箇所——Bhāskara ad BS 1. 4. 25, 2. 1. 27——中の読み ‘śaktivikṣeṣa-’ は ‘vikṣeṣa-’ の誤り)。

より創造論的文脈で用いられる類似表現「未開展の虚空」(avyākṛta ākāśa/-āk° 中性語) の例として——Bhāskara ad BS 1. 2. 22, 1. 3. 30, 2. 1. 14 (p. 95) (以上合成語形), Bhāskara ad Bhagavadgīta 9. 8。

以上に示した用例の個別的な検討は他の機会にゆずることとし、ここではただ、‘avyākṛta-’を基礎とする上記一連の概念が、Śaṅkara に特徴的な「未開展の名称・形態」(avyākṛta nāmarūpa) に対応するものであることを指摘しておきたい。

- ⑪ 第1例に関しては、一致部分は、sūtra 中の合成語 ‘janmādi’ の内容分析を行うわずか一か所であるが、主要 BS 注解における対応箇所の比較は、この部分が Bhāskara 注解文によるものであることを確信させる。

Śaṅkara janmasthitibhaṅgam (J.L. Shastri (ed.), Delhi 1980)

Rāmaṇuja janmāditi sṛṣṭisthitipralayam ‘iti’ に注意 (V.S. Abhyankar (ed.), Bombay 1914)

Nimbārka sṛṣṭisthitilayaḥ (V.P. Dvivedin (ed.), Benares 1910)

- ⑫ kāśyām uttaravāhijanbutanayātire samam paṇḍitais tenē (scil. kullūkabhaṭṭena) yaṃ kriyate hitāya viduṣāṃ manvarthamuktāvālī// (K ad M 1. 1, st. 1 cd, p. 4 ll. 20~21)

- ⑬ 注 ⑦に述べた、Bhāskara 説にそって解釈する「識者」がこの学匠グループのメンバーであった可能性も十分考えられる。

- ⑭ Cf. Kane 前掲書, vol. I (2nd ed.), part II, Poona 1975, p. 759.

- ⑮ Cf. G. Bühler, The Laws of Manu, Oxford 1886 (SBE XXV), Introd., p. cxxxii l. 27ff.

- ⑯ Kullūka に追随する M 注釈者 Maṇirāma Dikṣita (17世紀) が、「未開展の能力」や「未開展態」の用語をそのまま踏襲する (Maṇirāma ad M 1. 8, l. 15) などは、Kullūka を媒介とする Bhāskara 説再受容の一例といえよう。

## 追記

本稿は、日本印度学仏教学会第33回学術大会 (昭和57年10月) で行った研究発表「Vedānta 学者 Bhāskara の研究 (II)——Kullūka の Manvarthamuktāvālī 第1章にみる Bhāskara 説受容の事実——」(口頭) に基づくものである。